日々変わる子供の健康を毎日見詰める

⑦107 キャップスこどもクリニック西葛西（東京都江戸川区）

受付待合。予防接種や健診の患者と一般患者の区画を分離。安心してワクチンを打てる環境

「今までに培われた医療圏という概念があります。これをより効率良く活用するにはどうすればいいか。白岡亮平理事長はこの点を考えている。その一つのアクションとして当院は現在のような医療提供の在り方を提示しています」

今年6月に院長に就任したばかりの村田岳哉氏。4月にキャップスこどもクリニックに移るまでは東京の西部で勤務医として小児科の診療に当たってきた。その経験は今にもつながっている。

一年365日、毎日無休で患者を診る。夜は午後10時まで診療を行っている。通常であれば、二次救急に多くの患者が押し掛けてしまうところを、地域の医療機関がフォロー。お互いが協調して役割を補完し合える医療圏を確立したい――これが白岡氏率いるキャップスグループの目標の一つだ。

「私が以前勤めていた中核病院はちょっとした発熱などの患者で救急外来や小児外来が忙殺される状況にありました。その偏りを、できるだけ地域の医療機関で診ることで緩和したい」（村田氏）

核家族化が進む東京都内でも子育て世帯の多さでは有数といわれる西葛西地区。駅から至近の距離にあることでアクセスは容易だ。共働き夫婦が

待合。スペースを広く取り、絵本を置く。
子供たちのストレスを軽減する取り組みを行う

診察室。壁紙にも配慮。
できるだけ広く空間を生かしせるような工夫も

特別待合室。予防接種や乳児健診の患者はここで待つ。
隔離室も2部屋配置している

特別待合室の内部。
待合を分けているのは、特に病気のない人を
感染症などから守るために

携帯端末を使い、事前に問診。
診療開始までの時間を短縮し、効率化を図っている

絵本が配されている書架。選書は事務長を中心に行う。
スタッフの提案も逐一反映させる

都心に通勤する家庭も多い中、生活形態に対応しやすい立地といえる。帰宅後、夜8時を過ぎて発熱した子供が受診できる医療機関を探すのは簡単なことではない。クリニックの存在は福音だ。

内装や設備にも細やかな配慮がなされている。

「診療行為自体は子供にとってはストレスが非常にかかるものです。小児科医としてできるだけ軽減させたい。その他にもできることがあれば、と考え、院内に絵本を置いたり、壁紙にキャラクターを使ったりしています。心理的なストレスをできるだけ減らしてあげたい」（同前）

予防接種の推進にも力を入れている。風邪や発熱などの症状のある患者と、そうでない患者。両者を分けて診療を並行して行う環境づくりに心を砕いてきた。従来の診療所でも「予防接種外来」はあった。キャップスクリニックでは「特別待合室」などを利用して隔離することで、スムーズにより多くの患者がサービスを受けられる。

「短期にはより多くの患者さんに利用していただきたい。必要最低限な医療で済むよう、知識の共有も図っていきます。さらには予防接種をはじめ、予防医学に重点を置いていきたい」（同前）